

★授業のキーワードは「数」、マクロ、ミクロ。

物理の分野で、分子がたくさん集まってぶつかり合うことで温度が高くなるなど、ものがたくさん集まることで生じる性質を私たちは観察できる。ボイルの法則の気体の体積と圧力の反比例の関係も、量(数)の世界の性質(体積と圧力)の間に法則性がある、つまりマクロな性質変化の現象である。マクロとはそんなもので、私たちの身の回りにもたくさんある。物理や化学の世界での相転移(phase transition)では、気体・液体・固体という相が変化する。

経済学でのマクロとミクロは？

マクロは全体の法則性を扱う。「たくさんある事」は必要条件に過ぎないので、それ自体を研究するという意味ではない。マクロ経済学は、為替、金利、GDPなど経済指標がどのように形成されて、経済におけるショック(原油価格上昇など)が起こった場合、それに伴う経済指標の変化の様相を研究する。つまり変数と変数との影響関係を扱うといえる。

ミクロ経済学は、一人ひとりのぶつかり合い、相互行為に注目し、経済主体の行動様式、経済主体が自分の置かれた状況でどのような行動をとるかの意思決定を分析する。

社会学の場合は？

「社会に法則あり!」、マクロな法則の存在によって社会学が成立。

デュルケムは一見個人的な行為に見える自殺に法則があり、自殺に影響を及ぼす個人に外在する社会的な力があると主張した。自殺は心理的な問題に還元できない、社会的要因によって起こる(説明できる)「社会的事実」であるとみた。

心理的な問題として思われてきた自殺を社会的要因で説明することで現在われわれが「社会学」と呼ぶ学問を成立させたと評価される。つまり社会学は心理学と戦うことで学問として成立した。

デュルケムは自殺に関する統計を用いて、特定の人たちが他の人たちより自殺しやすい「法則」をみだし、自殺を類型化した。自殺率が社会によって一定の傾向があるのは、自殺率に影響を及ぼす社会的な力が存在するということだとみた。

しかし、「死」という人間の「実存」を統計を用いて、数が多ければそのなかにある法則を見出すことは感情の働かない世界であり、非社会的な要素、影響要因が無視されていると批判できる。

2009年日本の自殺率は3万2845名であった(警察庁)。これは事実。しかしこの数が多いのかそうでないかは事実の問題ではなく、解釈の問題。一年間これだけの人数が自殺するということはどういうことだろうか。3万2845人という数が「多い」と実感できる比較方法は？

15分ごとに一人が自殺していると計算

交通事故数(4914)と比較

鉄道人身事故の多さ

次回: Sociology Themes and Perspectives by Michael Haralambos プリントで自殺論の話